

## 工場の灯り

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 珉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009373">https://doi.org/10.14945/00009373</a>

# 工場の灯り

南

珉

小学五年の長男の彰あきらが学校へ行きたくないと言い出したのは五月の連休が明けてから間もなくであった。たまに学校を休んで自分の部屋で過ごしていることを妻の恵子から聞いた。今までになかったことである。

「あなたからもなにか言ってよ」

恵子から言われ、さらに何日か経ったが、なかなかタイミングが合わない。勤務先である語学塾ハングルナラの経営が岐路に立っていた。受講生が月ごとに減っている。夕方に開講する夜間1部の受講生三人がそれぞれの用事で欠席するメールがあった。全員で辞めることになるかもしれないと思いつつ、いちおう「それでは来週」という休講の返信メールを送ってから恵子に電話をした。彰は自分の部屋にいたと言った。ハングルナラの講義は夕方から深夜まで、それに土日に集中し、一家三人で顔を会することが少ない。ちょうど受講生全員が欠席し、次の講座時間まで二時間ほど空いたので、焼津旧港に近いレストランマリンに夕食を誘った。特段なにかを話すことはなかったが、生活に苛立っている妻も含め、とりあえず食事でもしておこうと思った。生活は「砂の器」のように、色あせ、風化し、ぼろぼろと崩れ落ちる。取り留めようがないと思った。

レストランマリンは駅前のハングルナラから歩いて十五分の距離にある。事務整理を簡単に終え、電気を点けっ放しで施錠し、階段を下りた。階段を下りた正面横はアーチ状の商店街になっているが、シャッター通りになって久しく、奥の方は明かりが乏しい。商店街入口の二階にあるハングルナラの蛍光灯だけが眩しくアスファルトを照らし出し、周囲から浮いている。私はシャッター通りを避けて迂回路になっている川辺の道を歩いた。小川には潮が満ちはじめていた。

ハングルナラは「韓国語の国」という意味の韓国語学習塾である。塾に勤め始めた時にはそれなりに繁盛したが、この頃は日韓関係の悪化で、受講生もめっ

きり減っている。講座は全盛期に比べて三分の一に減り、生徒は五分の一以下になったので、社長の李先輩はそろそろハングル講座を止めて、英語塾に切り替えようとしていた。近いうちに転職を考えないといけないかもしれないと思った。

韓国の地方国立大学の文学部大学院を卒業し、短大で非常勤講師も経験したが、薄給で生活は安定せず、将来に常勤になる見込みもなく、いつ首になるかもしれない恐怖から、常に教授に卑屈なゴマすりを重ねている自分にも嫌気が差した。韓国を出たほうがよいと思った。日本に夢があるとは思わなかったが、とりあえず韓国を離れたかった。それで語学学校の紹介で日本の地方国立大学に留学し、日本の大学院をもう一度卒業した。しかし、すでに四十歳に近い外国人を雇ってくれる会社はさすがになかった。その時に声をかけてくれたのが、大学院の李先輩だった。ハングルの教えながら経理や運営管理の補助をする比較的楽な仕事だったので、断る理由はなかった。韓流にハマっていた妻の恵子に会ったのもそこであった。従姉と同じ名前だったので親近感があった。ほどなく彰を妊娠し、そのまま籍を入れた。

レストランマリンに入ると、恵子と彰が待っていた。彰の表情を窺ったが、港に出入りする船をぼんやりと眺めているのでなにを考えているのかよく分からない。夏物の緑色のポロシャツに短い髪を輪ゴムで根元まできつく縛った小柄の妻は、素早く目で座るように指示した。駿河湾に開けられた港の入口からは小さい二隻の漁船が水しぶきをあげながら交差していた。

二階建ての一階はつり具と餌を売る店で、二階がレストランマリンになっており、ほぼ全席から焼津の港が見下ろせるようになっている。瀟洒な造りであるが、人口減少の著しい地方都市の衰退を象徴するかのようになり、来客は少なく、少女アイドルユニットによる新曲は店の空気を不自然に弛緩させていた。

彰は焼きカレーライスを黙々と食べ、漁船が出入りする音がするとしばらくそれを目で追っていた。小舟には電灯がつき、電灯に照らされた波紋は上下に光を反射する。港には街路灯が点き、沖は薄い闇に覆われ、港の突端にある灯台は明かりを噴きはじめていた。手前には街のシンボルである二少年の巨大な銅像が薄暮ですでに輪郭が崩れ、シルエット状になっている。海に向かって手を挙げている「蒼海行」という二少年銅像の左側には、カツオとマグロの荷下ろし場があり、遠洋漁船が冷凍魚を下すベルトコンベアーの機械音が絶え間なく響いてくる。漁船のクレーンには多くの灯りが点いている。

「学校は楽しくないの？」

食事が止まりがちな彰の様子を見ながら言った。夢中に食べている振りをしているようだった。

「……うん。」

彰は皿にちらかった残りのカレーライスを集めている。

「そうなんだ。行きたくないんだ」

「……」

沈黙の間を人気アイドルグループの曲が流れる。

「そうだよ。楽しくないよね」

「……うん」

ようやく食べ終わった妻が怪訝そうな表情をした。

「それでいいの？」

妻は彰から目を私に向けて、

「この社会でどう生きていくのよ？日本社会がそんなに甘いと思うの？どうやって食べていくのよ？」

自分がなじられているような気がした。それが甘くないことは一〇年以上の生活でよく分かっている。

「別にいいんじゃないの。なんとかなるさ。」

自分に言い聞かすように答えた。彰は黙っている。

「ならないと思うよ。あんたみたいな仕事はできるわけでもないし……」

妻の言葉に私も黙ってしまった。彰は韓国語が一言も話せない。韓国の実家に連れて行ったこともなく、家の中では韓国語を使うこともなかった。それが穏やかであった。幼稚園から妻の苗字である栗林を名乗り、いちおう国籍は本人が二十歳になって自ら選択できるようにしているが、それは養子縁組を嫌う私への妻の配慮でもあった。私自身、私とつながるものを彰に持ち込みたくなかった。私の記憶は私の中で終わりにしたいと思った。記憶は束縛となる。絆は拘束となる。記憶が未来を妨げ、絆が動きを妨げる。

三・一一の東北大震災以来、マスコミでは記憶と絆が盛んに呼びかけられているのを見ていると、そのような思いは一層強くなる。記憶と絆という名で彰は排除されるかもしれないと思った。繋がりと思いやりという美名で窮屈な思いを強要されるかもしれないと思った。

妻が妊娠し、それが男だと分かった時、私は祖先伝来で継ぐはずの「洙」の字やサンズイ扁の漢字を避け、彰と名づけた。親の過去ほど陰鬱で重いものはないと思った。

しばらくの沈黙の後、彰がぼそつと言った。

「みんなが東方時代ってからかうからさ」

「東方時代？」

咄嗟にその意味が分からず妻は瞬時に反応した。日本で活躍しているKPOP歌手の名前をもじったものである。いま彰になにが起こっているのか、なぜ学校に行きたくないのか、すべてが一瞬で分かった。沈黙の合間にベルトコンベアーの機械音に交じって小舟が港に入るエンジン音がどんどん大きくなった。

「彰、ママはね、あなたがうんと勉強して、大学に行って公務員になったほうがいいと思うの。パパのこともあるし、そうでないとこの社会で生きていけないよ。分かっている？勉強しないと、大井川辺りで工場の労働者にしかなれないよ。工場の労働者にもなれないかもしれないよ。それでいいの？」

KPOPと韓流ドラマしか知らなかった妻だったが、彰が生まれてからは韓国のことを一切言わなくなっている。彰の出生によって恵子は自分が置かれた境遇から他人との距離がうまく取れないようにみえた。それは母性本能によるものかもしれない。私はそうした妻が痛々しく、憂鬱であったが、どうしようもない運命として諦めていた。妻は彰を将来的には日本の公務員として育てることに情熱を注いでいた。地方国立大学の教育学部を卒業し、教師になることがよい道と決め込んで、彰にはそれを繰り返して言っている。それに私は口を挟まなかった。さいわい彰の成績もそれほど悪くないようで、大きな間違いがなければ無理な話でもないような気がした。しかしひきこもって音楽ばかり聞いている時間が長くなり、学校の欠席が頻繁になっていくと事情は変わってくる。大学どころではないかもしれない。

「あなたは公務員でないと生きていけないよ。いい大学に行って、公務員になって、みなと仲良く一緒にやっていかなきゃ。一人で孤立してはだめなんだよ」

彰はなにも反応しない。ちょうど港の入口に小さい釣り船がエンジン音を上げながら入ってきた。明かりに照らされた海が激しく動揺し、それにつられて明かりが揺乱した。

「一人でやる仕事がいい。人とあまり関わりたくない。だってそういう仕事もあるでしょう？」

「一人でやる仕事？それはあるさ。工場でベルトコンベアーの流れ作業を来る日も来る日もやる仕事でさ。二四時間三交代で、人と一言も喋れないの。とてもしんどい仕事だよ」

不服そうな彰の言葉に妻はすかさず言い返した。

「……」

「たとえばさ、大井川辺りの電子工場ではコンベアベルトから流れてくる小さい部品を、同じところに毎日嵌めていくんだよ。あるいは焼津でさ、冷凍マグロのしっぽばかりを毎日毎日切っていくんだよ。機械部品みたいになってね。昼も夜もだよ。それでいいの？」

「……」

妻は焼津の商業高校を卒業して事務補助職についていたので、工場での単純労働についている多くの同期生に対し、どこか優越感のようなものを持っていた。地元の商業高校を卒業して漁業組合の事務職に就職した後、彰が生まれてからは正社員を辞め、今は週六日ほど非正規パートで働いている。漁業組合の仕事は漁師の帰還に合わせて朝が早い。魚獲量の整理と漁船の欠損備品などの手配を行い、午後四時ごろに帰宅する生活を続けている。帰宅が早い分彰と一緒にいる時間が長い。将来のことは何べんとなく話していたであろう。

「工場の労働者になっても別にいいよ。人としゃべらなくてもいいし……」

しばらく沈黙の後、彰が答えた。

「彰ちゃんの場合はお父さんのこともあるし、そうは簡単にいかないよ。パパだってそれでも向こうでは立派な大学を卒業しているんだから。東方時代のことはママが先生に相談するから気にするんじゃないよ。」

妻の説得に彰は完全に黙り込んでしまった。夜間二限目の韓国語授業の時間が迫っていた。話を切り上げて店を出ようと思った。

「本人の希望でいいんじゃないの。勉強ばかりがすべてじゃないし。」

「あなたは何言っているのよ。無責任なことばかり言って。そういうご自分は大学、大学院まで卒業しているんじゃないの？ 楽な仕事ばかりやって逃げてきたくせに。工場なんかで働いたことなんかないでしょう？ まったく人の苦しみが分からないんだから」

妻が椅子から立ち上がり、一緒に出た。妻と彰が乗った軽自動車が駐車場を抜けるのを見届けてハングルナラへ向かう岸壁をしばらく歩き、満潮に近い小川で右折し上流に向かった。妻の言葉がよみがえってきた。たしかに私は人の苦しみが分からないのかもしれないし、楽な仕事ばかり目指して逃げてきたのかもしれないと思った。日本に留学を決心したのも先行きの見えない仕事からなにかの僥倖を期待したことも事実である。しかし、「工場なんかで働いたこともない」という妻の言葉は正しくないと思った。

それは一九八四年の夏のことであった。その時、私はソウル近郊の韓国最大の九老工業団地で労働者として働いていた。韓国での記憶は日本留学に際し、すべて封印しようと思った。妻の恵子と結婚し、彰が生まれるなか、おのずと過去の記憶は現実と乖離し、空虚化した。時間は忽々と流れ、何度も変質し、ことごとく現在と断絶された。自分の方からも意図的に断ち切っていた。

潮の匂いが強い川辺をしばらく歩くと商店街のアーチが現れ、入口にある塾の二階から漏れる蛍光灯の明りだけがまぶしかった。蛍光灯の明りは駅構内の線路にまで届き、黒い線路の上部が線路上に光っていた。私は塾に続く階段を上った。二人の受講生はすでに席についていた。

「アンニョンハセヨ」

「アンニョンハセヨ」

受講生はいつも普段の日本語よりテンションの高いあいさつをする。それに答えて私も普段の韓国語より明らかに高いテンションで返事をする。養護学校で教師をやっている田中と言う五十代の女性と自営業のカギの修理屋である金村という六十歳前後の男性である。KPOPと韓流ドラマにはまっているという。当初は十五人ほどで始まったが、毎年減り続けて今は三人になっている。市役所国際交流課に努めている内藤という四十代の女性ももうひとりいるが、最近は残業が多いといって欠席が続いている。おそらくそのうち辞めるだろうと思っていた。

授業は会話中心であるが、基本的には雑談に流れることが多い。韓国人や日本人が一生に一度も使えそうもない例文がよく出てくる。現実的でない語学例文は不思議なことに心の安心感を与える。それを何回か発音練習し、結局は雑談になっていく。

「あなたは韓国料理がお好きですか。」

「はい。大好きです。しかし、少し辛いです。」

「あなたは夏休みにはどこで過ごされますか。」

「軽井沢で過ごします。軽井沢はとても涼しいです。」

「明洞はここから遠いですか。」

「いいえ、それほど遠くありません。ここから電車で十五分ほどかかります。」

例文を何度も繰り返す。非現実的な会話例文には異様な世界が存在し、そこには心の安らぎのようなものがある。固定化し、観念化し、それで現実的な影の影響力もない、あたかも言葉の死体が集まっているような世界である。言葉がその意味から解放され、それで現実と過去と記憶からも断絶された世界に

私はなぜか安堵する。二人の日本人もそれを求めているのかもしれない。誰もが現実の生々しい言葉を求めているのではない。観念化し、固定化し、形式化した言葉には無機質的な安定感がある。あたかも違う国の言葉を教えているような感覚にもなる。

会話文から韓国の食べ物がどれほど辛いかを誇張的に説明し、二人から軽井沢についての長話を聞かされ、さらに韓国旅行で明洞に立ち寄った時のエピソードにただ頷き、ようやく夜間部の最終授業を終えた。無意味な疲労感が襲ってくる。教室の電気を消して東海道本線の地下通路を出てから瀬戸川と朝比奈川が合流する土手に出た。潮が少し引き始めたのか、川の流れが勢いを取り戻していた。夜の十時を過ぎていた。入江橋を渡り終わると、田圃と畑に囲まれた自宅マンションの灯火がいくつか見えてきた。その背後を高草山が稜線が囲んでいた。

伊豆一周の家族旅行を計画したのはそれから二週間ほど経ってからである。恵子はさっそく彰の担任先生に相談し、それ以来、東方時代と言われることはなくなったようであった。普通に学校に通っていると言う。しかし、こういう問題は表面的に収まっては悪化するケースが多いので、しばらく様子を見る必要があると依然としてナーバスになっていた。微妙に孤立しているかもしれないと思い、何度も話を聞いてみようと思ったが、気が引けた。話し合いでなんとかなるような性質のものでもないような気もした。代わりに何年ぶりの家族旅行を計画した。

「日帰りなのね？」

「まあ、それでいいんじゃないの」

私が「おもてなし」というようなものを極端に嫌がり、家族で泊まり掛けの旅はほとんどしないので、妻は遠慮して聞いてきた。従業員や仲居が巧みに内面に入り込み、家族の品定めをし、心理的な優越感を図っている節が何度かあったからである。それに私の日本語が乱れ、妻と彰は気まずい表情になる。従業員や仲居は素早くこちらの事情を斟酌し、安心し、関係性を微妙に揺さぶる。私はこれに窮屈を感じ、旅行を控え、出かける場合には日帰りで済ますことにしている。人間も風景として眺められる。

妻との話のすえ、国道一号線から修善寺を経由して天城峠を越え、河津に出て下田辺りの温泉で休憩し、松崎、戸田、大瀬崎をまわって三島に出る計画を立てた。すぐに李先輩に授業の代理を頼んだ。李先生は快く引き受けたくれた。受講生も少ないし、どうせ大した学力差もないので合同授業にすればよいと言っ



た。李先輩は最近英語のネイティブを探しているようだった。先輩の頭にはハングルナラからイングリッシュ・カンチュリーのような計画が着々と進んでいるのかもしれないと思った。韓国人同士の直感として転職の時期は意外と早いかもしれないと思った。

出発の当日にしぶしぶ車に乗った彰は終始無言だった。妻が気遣い言葉をかけたが、「うん」と「いや」を繰り返し、会話は続かなかった。妻は仕方なく私に話しかけてきたが、彰と後部座席にいたので話題は限定され、途切れがちだった。妻の実家や近隣住民ともあまり交流がないので、話題は少ない。

「ハングルナラ、そのうち辞めるかもしれない。受講生も減っているし。」

「やはり厳しいんだね。それで他の仕事の目当てはあるの？」

「とくにないよ。年も年だし、厳しいかも。どこかの組立工場で働くしかないかも」

「組立工場？それでいいと思うの？」

「……」

「いきなり、できると思う？」

「……」

返答しなかったが、おそらく無理だろうと思った。大学を卒業して文学博士学位を取得し、長年非常勤講師の生活をし、日本では韓国語教師以外の仕事経験がない。いざとなった場合は李先輩に頼み、講座の一部を残してもらい、以前に話があった公民館自主講座を引き受け、個人塾などを開けば、何とかなるような気がした。しかしそれで生計が成り立つかどうかは分からない。定年退職して地元の私立短大理事に天下った日本の恩師を訪ねて韓国語非常勤の仕事をお願いしてみようと思った。以前からそのような話があったが、韓国での嫌な思いが多かったので断っていた。妻には組立工場での仕事を言い出したが、それを続ける忍耐など私にないことは経験上分かっていた。日本の地方都市に流されてきた自分の半生がそれを立派に証明しているのである。

下田の道の駅の二階にあるレストランで昼食をすまし、下田街道沿いを走ると、村興しの一環で建てられた日帰り温泉が見えた。立ち寄ろうと駐車場に車を止めたが、彰はあまり乗り気でないようだった。自分は車で待っていると言うので、仕方なしにそのまま松崎まで進み、観光遊覧船に乗ることにした。

松崎を出たのは五時過ぎで、初夏の太陽光は車内深く斜めに差し込んでいた。小舟に乗り、海辺に点在する小島を周り、堂ヶ島の洞窟を見物したが、小舟は小さい波にも激しく揺れた。波が高くて洞窟の奥までは入れないというので、

入口で中を覗いたが、採光で五色に輝くという洞窟の中はぼんやりと明るいただけで、色らしきものは何も見えなかった。しかし彰はそれほど残念がっていない。それが気がかりなのか、妻も車に乗ると黙り込んでしまった。戸田港を過ぎた辺りから周囲は暗くなり始め、対岸の静岡市には灯りが点りはじめていた。沼津の市街地を抜けて国道一号に出るまでにはだいぶ時間がかかるだろうと思った。信号待ちと市街地の渋滞で疲れが出たのか、妻は貧弱な体を小さく丸めて隣でうとうとし始めた。彰に話しかけようと思って思案したが、言葉を見出せずにいた。彰は後部座敷に深く座り、窓の外を眺めていた。

ようやく国道一号線に出て富士市の高架道路を走り出した時、いきなり彰が大声で言い出した。

「パパ、綺麗だね」

彰の言葉に目を覚ました妻は意味が呑み込めず、窓の左右を眺めた後、後部座席の彰に目を向けた。

「工場の明かりがすごいね」

私の言葉でようやく意味が分かった妻は、彰を真似て窓辺に顔をつけ、海の方を眺めていた。海側には富士の製紙工場コンビナートが続いている。勢いよく煙を上げている高い煙突が林立し、むき出しの無数のパイプが縦横に走り、鉄骨で組み立てられた構造物には無数の灯りが点いて、夜空を光らせていた。巨大な生き物のようで、あたかも深呼吸をしているようにも思えた。

「綺麗だね」

妻が頷いた。

「綺麗だよね」

彰の言葉は明らかに興奮気味だった。彰が後ろの窓を開けたので、私は車のスピードを落とした。パルプを茹でる体臭に近い独特な匂いがした。異臭ではあるが、生命感があるような匂いであった。

「もっと見たい？」

「いいの？」

「もちろんさ」

工場の明かりが車の背後になった時、私はハンドルを右に回した。田子の浦の海沿いに築かれた防波堤に出ようと思った。川沿いの道に出て港の入江を目指した。港には焼津では見られない大きな貨物船が無数の灯りをつけて荷物を降ろしていた。おそらくパルプであろう。入り江の突き当りで駐車スペースを発見し、車を止めて防波堤に続く階段を上った。防波堤からは製紙工場コンビ

ナートが一望できた。近くには貨物船が煌煌と明かりを発し、その背後には製紙工場の無数の灯りがきらきらと光り、遠くの富士山麓には民家の灯が空の星粒のように見えた。足元から急に波の音がした。

「すごいね」

彰は興奮して言った。

「すごいわね」

妻が同調し、私も「すごいね」と答えた。

「パパ、後ろに富士山も見えるよ」

彰の言葉につられて空を見上げると、雪の解けた富士山の黒い輪郭がうっすらと明かりに照らされていた。強大な黒い物体が人を驚かすように、空一面からワァーと叫びながら飛び掛かっているようにも見えた。常に見ている富士とは違う光景であった。ふと彰と妻と私自身に重くのしかかっている得体の知れない巨大な闇のようでもあったが、彰の言葉がそれをかき消した。

「すごく明るいね」

「そうだね、明るいね」

「パパ、おれ、工場に勤めなくなったよ」

「いいんじゃないの」

彰の勢いに呼応して答えたが、隣にいた妻が、

「あまりいい加減なことを言っても困るわよ。彰には将来があるんだから」

妻の言葉がとても不愉快だった。思わず、「じつは、一九八四年にさ、おれも」  
とまで言い出したが、

「それは1Q84でしょう？ハルキの」

妻の言葉に私は口を噤んだ。今まで韓国でのことは妻にも彰にも何一つ言っていない。それはハルキの1Q84ではなく、たしかに一九八四年のことであった。

一九八四年の夏、私は二年半の兵役を終え、興奮で高ぶる解放感を抑えながら、ポブラで囲まれた兵舎を後にし、営門を出た。

「兵長殿、長い間お疲れ様でした」

二等兵の階級章をつけた衛兵の言葉を後ろから聞きながら、短い拳手で応えようと思ったが、もう「娑婆」に出たので軽く頭を下げた。支給された迷彩色の背囊はずっしり重かった。中身のほとんどは兵舎で読んでいた文学関係の書籍だった。四月に創刊されたばかりの季刊文学誌「実践文学」の創刊号と雑誌「解放神学」が数冊、それに詩集と小説集が詰め込まれている。行先はもう決

まっている。ひとまず実家に戻り、資金を確保し、九老工業団地を目指すことにしている。大学卒業までは二年を残していたが、辞めてもいいと思っていた。

大学三年に復学し、このまま卒業し、母と長兄の期待に沿って田舎の教師として落ち着く人生が息苦しかった。母と早死した父の代わりに農業を引き継いだ兄は、大学に通う私に一家の将来をかけていた。希望を他人に託して生きる家族への憤りと憐みが心の中で渦巻いていた。貧しい農村出身の私が、一度も故郷を離れたことのない母や兄の希望どおり、出世をして一家を支えることがいかに難しいか、入学してすぐに分かった。祖先伝来の土地にしがみ付き、三度の飯さえ食えればよいと思っている母と兄は、都会が、大学が、さらに社会の構造が全く分かっていないと思った。社会には大きな矛盾があり、それを根本的に変えなければならないと思った。そうした時代の大きなうねりがあった。私はそうした社会的なうねりの先端になっている文芸部に入り、文学や社会科学系の発禁書ばかり読んでいた。しばしばデモにも出た。すぐに担当の刑事がつき、月に一度は下宿先を訪ねてくる。特高であった。

「趙君、お母さんとお兄さんが心配しているよ」

年寄りの特高警察は口癖のようにそう言って、素早く私の書棚を物色した後、二、三冊の本を取り出しながら、

「趙君、これは発禁書だからおれが持っていくよ」

「どうぞ、ご勝手に」

「ちゃんと食事しているの？」

「はあ？まあ……」

警戒はしていたが、いきなりの訪問に発禁書を隠せず、慥然として押収を承諾する。教科書で習った日帝時代の特高とは似つかない老刑事にはどこか憎めないところがあった。なぜか自分で勝手に親代わりのように振る舞っていた。悪名高いと教えられた日帝時代の特高も案外こうした人間だったかもしれないと思った。特高と鬼ごっこをしているようだったが、そうしている自分がなにか凄く偉いような気もしていた。あたかも日帝と戦う闘士のような錯覚に陥ったりしていた。そうこうしているうちに大学二年が終わり、徴兵の赤紙を受けた。兵隊では終始要注意兵士のように扱われたが、その分自由が利き、休暇には古本屋街を歩き回り、文学関係の本を買い集めて読んでいた。一九八四年の春、創刊されたばかりの「実践文学」を手に入れ、満期除隊を目前にした私は時代の大きなうねりに遅れまいと思った。さっそく自分の文学を実践しなければならぬと焦った。

実践文学とは、従来の文学を知識人の観念的な知的遊戯と見做して否定し、一般民衆の立場で、社会矛盾を実践の中で改革することを趣旨とする。農民や労働者と同じ目線で、現場の労働を実践しながら、その体験を描くことによって担保されると言われていた。ブルジョア階級のインテリ文学を否定し、労働者による社会革命を目指した戦前の日本プロレタリア文学の二番煎じだったが、当時の私には妙に共感するところがあった。農民や労働者の苦労を誰よりよく知っていると思っていた。一先ず兵役が終われば、労働現場での実践を試み、それを素材に文芸部の必読書でもあった小林多喜二の「蟹工船」のような作品を書いてみようと思った。ちょうど大学に復帰する翌年三月までには半年以上の時間的余裕があり、毎日雑草と苦闘するうんざりするような農作業を手伝うより、工場で働いたほうがよほど意味があると思った。「実践文学」の主体も農民ではなく、あくまでも工場労働者であった。さっそく実家に戻り、母に金の工面を執拗に迫った。

「お願いだから、来年の春までは兄ちゃんを手伝って家にいなさいよ」

母は懇願したが、私は聞かなかった。父の代わりに小学校を卒業して農業を継いでいる兄はやや耳が遠く、つねに寡黙であった。兄がいないところを見計らって、母に交通費と給料までの滞在費を要求しつづけた。母は兄と私の間で板挟みになっていたが、とうとう諦めたのか、トウガラシの乾燥が終われば市場に売り出すので、もう少し待ってくれと言った。兄は私と母のやり取りについて一言も言わなかった。いつものようにニンマリと笑いを浮かべていた。言葉が少ないので、なにを考えているのかよく分からない。市場は五日に一度開かれる。

バス運転手の鬚髯をかいながら、母はトウガラシを満杯に入れた大きな包みを無理やりにバスに詰め込んだ。醴泉市場まで一時間ほどかけて運び、市場の仲介人と交渉して売る。醴泉バスターミナルで包みを降ろした後、母は大きなトウガラシの袋を頭に載せ、市場が開かれる市街地を目指して消えて行った。荷物が人より大きい。私はバス停で待っていた。みすばらしい母の姿が恥ずかしく、また小さい金額をめぐるしつこく交渉するからであった。真夏の太陽がターミナル一带のコンクリート地面を照り返していた。ターミナルに隣接した茶房の扉は開け放たされたままで、古い演歌がやかましく流されていた。ときおり、茶房から中年女性が「暑いね」と言いながら出てきて、コンクリートの地面に勢いよく水を撒いては中に消えた。コンクリート駅舎の日陰に座って一時間ほど待っていたら母が帰ってきた。

「今年もトウガラシの値段が駄目だね。まったくお金にならないよ。」

よく聞こえない発音でもぐもぐ言いながら、五万ウォンほど手渡す。母の手には汚れた現金がまだ半分ほど残っていた。

「これじゃぜんぜん足りないよ」

全部よこせという剣幕で母の手元を見つめた。

「差し歯が壊れて歯茎が痛くてね、これで治そうと思ったんだけど……」

母は前歯の差し歯を見せた。一塊の差し歯が歯茎からずれ落ち、舌を動かす度に、一塊の差し歯が前の歯茎から離れたりくっ付いたりしていた。唇と舌をうまく使って差し歯が落ちないように支えているようだった。母の言葉が以前より不明瞭で、発音が空気漏れしていた理由が分かった。母の哀れな姿に無性に腹が立った。

母は結局トウガラシで換金したお金をすべて渡してくれたが、千ウォン札何枚かを母に残し、駅に向かった。母の視線を背中に感じたが、あえて振り向かなかった。母を振り向いたら私の敗北であるような気がした。

禮泉駅を出発して榮州駅で中央線に乗り換え、ソウル清涼里行きの列車に乗った。窓の外は田圃が続き、七月の稲はつやを増して青々と茂り、波のように揺れ動いた。開け放った列車のドアから稲の匂いが肺の奥まで浸み込んできた。稲の緑色の匂いを吸い込むたびに、悲しみと怒りが交互に膨らんだ。母の境遇を思い出し、兄の人生を考え、家族の現実を思い、また家族の糸に縛られている自分の境遇に激しい怒りを覚えた。怒りはまた瞬時に悲しみになり、何度も涙をこらえた。革命をするしかないと思った。文学を実践することですべての境遇から解放されるかもしれないと思った。それが実践文学であり、解放文学であり、民衆文学が必要な理由であると思った。車窓の風景が内面深く刻印されるように刺し込んできた。

列車が山脈の長いトンネルに差向かうとき、隣に座っていた私と同じ年頃の女性が赤い網袋から卵を取出して殻を剥きながら食べ始める。榮州駅から乗り込んだ女性で、どうも旅行者とは思えない身なりであった。ジーパンを穿き、ボタンのついた白いシャツを着ていたが、旅行カバンが見当たらず、白いシャツは酷く汚れていた。そのわりに長い髪の毛は清潔で、いい香水の匂いがする。妙に色っぽい女性で、私を何度も見ていたので、見返したら視線が会った。すると女性は新しい卵を手にとって私に「どうぞ」と勧めてくる。細い指先の爪は半透明のマニキュアが塗られていたが、ところどころはがれていた。私はそれを受け取ったが、目の前では食べられず、礼を言って、手に持っていた。女

性は自分の行為に急に恥ずかしさを感じたのか、その後は窓の外を眺める。私は卵を食べ始めた。

開け放たれた窓から風が入ってくるたびに香水の匂いが伝わり、女性の汚れた上着のシャツがはだけ、シャツのボタンとボタンの合間が大きく膨む。ボタンの合間から綺麗な形をした丸い胸が露わに見える。風はしきりに吹いて汚れたシャツを膨らませ、そのたびに白い胸が現れる。女性は下着を付けていなかった。私はつつい何度も丸く綺麗な胸を覗いたが、そのたびに先ほどの母との別れを思い出し、姿勢を取り直して決心を新たにす。しかし先ほどの感情にはなかなか戻れなかった。女性も私の視線が気になったのか、どこへ行くのか聞いてきた。九老工業団地に職を探しに行くと答えた後、道順がよく分からないと付け加えた。私の境遇に同情したのか、「働ける場所なら私もいくつか知っているけど」と言って、兵役は終わったのか聞かれた。つい先日陸軍兵長で除隊したばかりで、大学に通っていたが退学するつもりであると答えた。女性はしばらく考えて「だったら大丈夫だと思う」と言ったあと、「道を教えてあげる」と付け加えた。

列車が清涼里駅に到着したら女性は、「ついて来て。バス停まで案内するから」というので、複雑な迷路の路地をいくつか抜けてバス停に向かったが、路地の裏は駅前の有名な私娼街で、路地の店先に立っている何人かの女性が彼女に挨拶をした。「帰ってきた?」「彼氏なの?」と聞かれたような気がする。顔が真っ赤になった女性が短い言葉で「違う」と答えたような気がした。早足に路地を抜けてバス停に着くと、女性は九老工団行きのバスの番号を教えてくれたあと、元の路地に走って戻った。そこで働く女性だろうと思い、酷く心が動揺した。女性が消えた路地の入口を覗いたが、もう姿は見えなかった。もしかしたら店先に出ているかもしれないと思い、迷路になっている路地を二度ほど歩き回ってみたが女性の姿は見えなかった。バス停に戻り、暫く何台かの九老行きのバスを見送ってからようやくバスに乗った。

九老工業団地に近い宿泊滞在が可能な読書室に入ったのは夕方近くであった。案内された読書室は多くの勉強机が並んでおり、その机一台分が自分のスペースということになった。椅子を机の上に上げて下に布団を敷いて寝ることになっていたが、机の範囲をはみ出さないように注意された。共同雑居部屋に机と椅子がそれぞれの占有部分になっていた。プライバシーはないが、値段が安い分、地方から上京した労働者達がよく利用している。ここで勉強して公務員試験に受かった労働者もいるようだったが、それは私にはどうでもよいことであった。

さっそく夜の工場街を歩き、案内板や煉瓦壁に貼られた求人広告を確認すると意外と「随時募集」の貼紙が多かった。明日面接する会社に目星をつけた後、読書室の裏にある佳里峰市場で夕食を済ました。白熱電球で照らされた市場は豚と犬と牛の生肉、腐った野菜と魚、各種調味料の匂いで形容しようもない匂いで満ちていた。コンクリートの通路は店から出る洗い物の汚水で濡れ、白熱電球の灯に赤く照らされていた。汚いが値段が安かったのでここで毎日の夕飯を済ますことにした。

翌日、履歴書を持参して家電部品製造会社の面接に出ると、即採用で、翌日から出勤していいということになった。学歴欄には高卒と書いて大学進学のごことは隠した。「学歴詐称はないよね」と念を押されたが、それは固く否定した。工場は大学生が内密に入り込んで、労働組合を組織したり、労働争議を主導したりしていたので、工場はそれを警戒していた。さいわい私の出身が韓国でもっとも貧しい山村地域で、兵役を終えたばかりということもあり、その辺は安心しているようだった。生産二課に配置された。

生産二課は十二のラインがあり、私は第三ラインに配属された。出勤したら課長は私の履歴書を簡単に見て、第三ラインの班長を呼びだし、案内するように言った。三十歳に近い班長は私を連れて十人ほどの班員に紹介し、ラインでの位置と仕事内容を教えてくれた。みなからは李下士というあだ名で呼ばれていた。下士と聞いて彼が兵隊の下士（伍長）出身で、おそらく紅葉下士であると直感した。一般の徴兵から一部を選抜し、六か月ほどの下士官教育を施して下士に任官するので、兵隊では彼らを紅葉下士と軽蔑して呼んでいた。訓練中の六か月間は赤い階級章をつけ、任官すると初めて黄色い階級章に戻るの、兵卒はそれを皮肉って紅葉下士と呼ぶ。任官して内務班長として転属されるが、すでに二〇か月以上も兵役についている上等兵や兵長は紅葉下士を上官とは扱わず、紅葉下士と呼び捨て、ほとんど部下のように扱った。階級と年季の間で、じつに苦勞が多い。

李下士は気さくで、冗談が好きで、みなをよく気遣いながら班をまとめていた。兵隊で鍛えられたものであろう。班には私より若い労働者が半分で、中卒の女性が多かった。三十歳ほどのアジメと呼ばれる子持ちの女性が一番年上で、彼女はとにかく明るかった。猥褻な話と冗談が絶えない。班では一番年長で十年以上も働いていた。労働はきつく、給料は安く、将来性もないので、女性は結婚して辞め、男性は定着しないらしい。

ラインにはベルトコンベアーが一本走り、生産一課で裁断された材木の切れ



端が運ばれてくる。ビデオデッキの外ケースを作る工程の一部で、班の仕事はその木材部分を仕上げることだった。木材を機械で磨き上げ、それに塗装を行い、塗装の上に傷が残っているかどうかを細かにチェックする。傷が見つかったらそれを研磨剤や研磨ペーパーで磨いて消し、もう一回塗装を行い、それに鉄製の部品をボンドで嵌めこみ、完成する。それを最終的に李下士とアジメがチェックする。中卒の寡黙な熟練工が担当する塗装を除いて、作業は単純なもので、木材の傷を見つけてひたすらそれが消えるまで磨くのである。ほとんどの木材にはなんらかの微妙な傷があり、それを消していく。傷が大きい場合には機械でもう一度研磨し、同じような作業を繰り返す。単純な仕事だが意外ときつい。種類の違う様々な研磨ペーパーで磨いても木材の傷はなかなか消えない。ベルトコンベアーは絶え間なく製品を運んでくる。クレーンが効かない工場は暑く、横一列で並ぶ一二班ほどあるラインからは機械の軋む音が絶えない。ボンドの匂いが充満している。それぞれ違う作業を行っているが、最終的にどのような形になるのかは分からなかった。私はベルトから運ばれる木材の傷を消してはラインに流し、消しては流していた。気が遠くなるような作業で、田舎の草取りとあまり変わらなかった。取っても取ってもまた生えてくる雑草のように、傷のある木材は次から次へと運ばれてくる。

李下士とアジメはしばしば遅れがちな私の応援に来てくれた。やかましいほど大きなブザーの音で昼食時間が始まり、ようやく少しの休憩が取れる。班ごとに集まって猥褻な雑談にふけるが、私はそれには黙って聞いていた。夕方に仕事が終わると市場で食事を済まし、ソウル市と安養市の間を流れる安養川の土手に出た。様々な生活用水と工場の排水で川は悪臭を放っていた。工業団地に電気を供給している高圧線が川を横切り、巨大な鉄塔が何本も空にそびえていた。夜の工場街は薄暗く、対岸の遠くに光明市鉄山洞の民家の灯りがいくつか灯っている。高圧線は位置を示す灯が明滅している。涼しい風が絶えず臭気を運んでくるが、人間の生活の匂いにはなぜか形容しがたい悲しみが漂っている。

私は仕事が終わると毎日安養川の土手を徘徊した。高圧線の鉄塔の明滅する灯が美しいと思った。たまに金浦空港を目指す明かりをつけた飛行機が飛んでいる。社会運動に携わる仲間を探し、同志と連携を模索しなければならない。土手を往復しながら大学で教わった「工場の灯り」という歌を何遍も口ずさんだ。

西山に夕日がかかり、一人で川辺にて佇むと、  
顔見知りの人々が一人二人と家路につく。  
垂れ下がった肩と疲れて窪んだ両目は  
夕日に赤く染まり、胸の中は波のように揺らぐ。  
遠く対岸の工場の煙突は黒い煙が吹き上げ、  
順伊の家の小さい煙突からは青白い煙が上がる。  
川辺は暗み、風は吹き、星は煌めくけれど、  
対岸の工場に出た順伊はまだ帰って来ない。

夜が更けると九老工業団地は黒闇の中にたたずむ。風は絶え間なく異臭を運び、対岸の光明市鉄山洞の明滅する灯だけが小さく微かに遠い。足が疲れると読書室に戻る。建前上は読書室という名前なので早く就寝することが禁止されていた。勉強と読書のふりをしないといけなかった。たまに「実践文学」や最新号や小説を買ってきたが、本を読む体力と精神力は少しも残っていなかった。十二時を過ぎて急いで就寝し、起き上がってはすぐに工場へ向かう。

「なんでこんなところで働いているの？あんたは不思議な人だね」

休憩の時間にアジメが突然聞いてきた。ふくよかな丸い顔でいつもニコニコ笑っている。悪意のかけらも無さそうな顔である。この工場で旦那と出会い、旦那は別のいい会社に移っていると言っていた。アルバイト感覚で続けているが、乳飲み子がいるので夜勤はできないという。

「こんなところにいちゃ結婚なんかもできないよ。将来性もないし、せいぜい李下士みたいにしかないよ」

李下士がなにかを言ったのかもしれないと思った。私の出身高校が地方の名門進学校であることをアジメに漏らした節があった。アジメの言葉に返答せず、私は笑ってごまかした。アジメは近寄って大きな胸を張り出しながら。

「あんたもよかったら、おっぱい触っていいよ。彼女いないんでしょう？少しならいいよ。」

と言った。私が当惑していると、隣にいた李下士があたかも軍事教官による見本でも見せるように、アジメのところへ近寄って両手で服の上から胸を軽く揉みながら触った。アジメはとくに嫌がらなかった。隣にいた塗装の熟練工が「私も」と言いながらアジメの胸を片手で軽く揉み触った。

「もんだ方が乳の出がいいからね。まあ、すり減るもんでもないしね」  
と言った後、熟練工は仕事の下準備にとりかかった。アジメは三班の男に限っ

て自分の胸を触ることを許していた。たまに若い男たちが近寄って縁起がいいと言いながらアジメのおっぱいを触る。アジメは「ちょっとだけだよ」と言いながら、笑って許していた。アジメは私に何度も「いいよ」と言いながら、胸を突きだしたが、私は他の班員のように人前でアジメの胸を触ることはできなかった。それは性的行為と言うより仲間に入る儀式のようなものであったが、私にはそれが酷く性的行為のように思われた。秘かに列車での女性の胸を思い出した。アジメはラインの雰囲気をごまかすためにそれを許しているように見え、笑いと言談と猥褻な話を絶やさない。アジメには不思議な魅力を感じ、誰もいないところで一度触ってみたい衝動に駆られたが、工場の終了チャイムになるとさっさと帰ってしまう。旦那のことはとても愛しているようだった。

工場街の汚い塀に張り付いたチラシを頼りに、城門外教会を訪ねたのは上京して一か月ほど経った頃だった。労働運動と民衆運動家で有名な朴牧師が主催する教会で、ちょうど逮捕された朴牧師を奪還する集まりがあると書いてあった。バスで永登浦にある教会を訪ねたが、教会の中に入る入り口で教会関係者から厳しい検問を受けた。兵役を終えたばかりの短髪で、田舎者の挙動不審のせいもあったのか、警察のスパイと疑われ、荷物検査と長い尋問を受けた。教会の中に入って自己紹介という名でさらに厳しく追及された。不愉快であった。教会に集まった男女は工場で働く労働者とは明らかに違う表情で、厳しい目つきで精悍な感じがし、動作は機敏で、統一性があった。自分が入り込んではいけない世界に入ってしまった感じであった。

簡単なセミナーのようなものが開かれ、政権打倒、民主解放というようなスローガンが唱えられた。私にも意見を求められたが、うまく場の空気が読めず、意見を言うことができなかった。場の雰囲気では彼らは反政府運動と革命運動を専門的にやっている人達であると直感した。労働者の匂いがしなかった。セミナーが終わり、歌と踊りが始まったが、その民衆歌謡を私はほとんど知らなかった。解放踊りのリズムに合わせて歌うが、私はまず解放踊りというようなものが踊れなかった。その奇妙な集団ダンスは、たまにニュースで流れる北朝鮮人民が大広場で踊っている群舞と同じであった。円陣のようなものを組み、二人ずつ腕を組みながら回転し、さらにパートナーを変えて回転し、ほぼ全員とその行為を続けるのである。片手と片足を上げて高く跳躍し、くるくる回転する踊りの早いテンポのリズムに私は戸惑った。田舎の農民はそのような踊りをしないのである。それぞれのおのおの手足を自由に動かし、それを統一することはない。個々の身体の解放があるだけで、集団の拘束された踊りではない。

歌と踊りから直感的に北朝鮮の影響が非常に強くあることが分かった。私が大学文芸部にいた頃とはすっかり様変わりしていた。なにかが大きく変わっていた。私は終始、この新しい民衆歌謡が歌えず、異様な踊りのリズムについていけなかった。それは私が知っている農民のリズムでもなく、踊りも異様に人工的であった。場を間違えたような不安があった。自分が試されていることも直感した。

踊りと歌が一通りに終わって休憩していると、三、四人の青年が私のところに近寄って、険しい表情で「ついてこい」という。教会の入口に近い庭に案内された時、彼らは一斉に私を取り囲んだ。その中の一人が前に進み出て、

「消えろ。この野郎」と怒鳴りながら、私の胸を強く推した。倒れそうになった。バランスを立て直そうとしたら、もう一人の青年が足で蹴りかかりながら、「さっさと消え失せろ、イヌの手先が、なにしに来たんだ！」と怒鳴った。

異常な状態にあっけにとられたが、反応する暇もなく、私は城門外教会の外に追い出された。周りに見張りをしていた武装警官が私をもの珍しそうに眺めていた。

読書室に戻り、暗くなってから安養川の土手に出た。「工場の灯り」を口ずさみながら、土手を何往復も徘徊した。工場街はうす暗く、対岸の遠くには民家の灯りがほのかに明るい。城門外教会での出来事を考えた。城門外にもう一つの頑丈な城門が築かれているような気がした。城門から締め出された人たちのために建てられた城門外教会は、城門に対抗する過程で自らも大きな城門を築いたと思った。排除された側は、排除した側と同じ理屈で、今度はみずからが排除できるもう一つの対象を作り上げているように思えた。自分の居場所はどこにもない。ふと、それがいま彰に起こっているのではないかと思いが及んだ瞬間、防波堤の下から波の音がした。妻の声が聞こえた。

「もうそろそろ帰ろうよ」

工場の夜景を見た後、彰は工場夜景に興味を示し、妻の携帯を借りてネットで調べているようだった。妻の話によると、いま工場夜景がとても人気で、ツアーが組まれているという。京浜工業団地と阪神工業団地と北九州市の製鉄夜景ツアーは予約が必要であるとも言った。

「変な趣味だね。日本人は贅沢だからナア」

と答えたが、それに惹かれる理由が分からないでもなかった。私がいた頃のうす暗く陰鬱な工場街とは比べものにもならないほど工場は明るくなっている。工場の中で働く人たちも大きく様変わりしているだろうと思った。アジメや李

下士や若い塗装工のような工人はもういないだろうと思うと、少し寂しい気もするが、それはよいことなのだろうと思った。一九八四年、私は初夏から秋になるまで工場にいた。汚水で悪臭を放つ安養川の土手を真夜中に歩きながら、対岸の安養市鉄山洞の民家と高圧線の灯と夜間を飛ぶ飛行機の灯火をぼんやり眺めながら、「工場の灯り」を歌っていた。希望は見えず、闇の中で孤立していた。もしかしたら列車の女性にまた会えるかもしれないと思って、清涼里駅前の路地を三度ほど回ってみたが、女性の姿はついに見えなかった。

十月になった読書室の床は日々ひんやりと冷たく、工場の空き地にはコスモスが咲いていた。臭気に満ちた佳里峰市場の狭い店先に置いてあるテレビで、偶然にマイケル・ジャックソンが奇妙な踊りを踊っている姿を初めて見た。テレビの横には犬と豚の頭部がむき出しのままぶら下がっている。ぼんやりとマイケル・ジャックソンの踊りを見ていた時、一つの世界が完全に終わったと思った。私は二周も三週も遅れた世界に漂っていると思った。すべてを終わりにし、春の新学期まで実家で耐えることにした。気持ちは整理できなかったが、春になると新芽のように、また新たな気持ちが芽生えることを期待した。

彰の夏休みが始まる前に、ハングルナラの李先輩から秋から英語に転換するという話があった。企業登録変更の手続きが厄介なので、ハングルナラのままで営業すると言った。新規運転資金は知り合いの在日同胞から借りることにしたという。ハングル講座も少しは残したいので手伝ってくれと頼んできた。それに小中学生の英語なら少し担当してもよいという。

「ハングルナラがカタカナでよかったよ。なんか英語っぽいんじゃない。給料はだいぶ減るんだけど、続けてほしいんだ。やっぱり最後に頼れるのは同胞なんだからね。」

「同胞？」

と不思議に思いながら、李先輩の提案には即答を避けた。いまさら英語が教えられるとは思わなかった。「同胞」という言葉にも妙な違和感を覚えた。彰が最後に頼れる同胞は誰になるのだろうかと思いが及んだ時、ハングルナラを辞めたほうがよいと思った。まだ少し時間があるので、大学の恩師に相談するか、場合によってはハローワークにも通ってみることにした。今まで流れてきたように、漠然ではあるが、またどこかへ流されていくだろうと思った。そして流されてもよいと思った。

韓国の山村で生まれ、日本の焼津にいる自分を、恵子と彰を抱えながら、また職を探すことになるかもしれない自分を、流されてきた人間の到達点である

とは思いたくはなかった。母や兄の期待通りにはならず、最後を迎えた母が私を心配する言葉を何度も言い残したというのが、その内容を私はあえて兄から聞き出そうとしなかった。母の思いは母の中で終わってよいだろうと思った。その思いの重圧はとても私が背負えるようなものではない。祖先伝来の田畑が見下ろせる母の土饅頭の前で、簡易葬儀で埋葬と脱喪を同時に終えた私は、魯迅の「故郷」を思い出しながら、もう故郷に戻ることもないかもしれないと思った。絡まった糸から解き放たれた解放感のようなものがどこかにあった。

夏休み中に京浜工業団地の夜景ツアーを妻に提案したら、妻は大賛成であった。それを妻から聞いた彰が私に飛んで来て、

「パパ、ぼくが詳しく調べておくよ」

「頼むよ」

「夏休みの自由学習にしてもいい？」

「それはいいんじゃない。生涯学習にしてもいいと思うよ」

私は彰の調子に合わせて冗談半分に答えた。

「生涯学習？」

隣にいた妻が怪訝そうな表情で聞き返したが、知らんぷりをして無視した。工場夜景見学を彰が喜んでくれたことが素直に嬉しかった。内心、彰には学校とか勉強とか同胞とかどうでもいいよ、と言ってやりたい衝動があったが、抑えた。私には私を照らしてきた灯りがあり、彰はまた新たな灯りに照らされていくだろうと思った。そして私が見た工場の薄暗い灯りについて彰に語ることはないだろうと思った。語り継がなければならない記憶などなにもない。途絶えた記憶からまた新たな記憶がおのずと芽生えてくるだろうと思った。(終)